

ほかにもいくらでもあると思うのだが、なぜか semelle (靴底) などという語に、しっかり*がついている。靴底って、そんなに重要な単語かなあ...。もちろん、フランス人なら子供でも知っているはずだけれど。あるいは1年間フランスに留学したとして、se repentir (罪を悔い改める) などという表現を使う機会はあるのだろうか。私は今までにこんな単語を使った覚えがない。

逆に、フランスで出版されている6~7歳程度までの子供向けの辞書(先ほど言及した辞書よりさらに小さな子ども向け)ではどれを見ても掲載されているのに、日本の辞書には全く*がついていない語として、dauphin (イルカ)、pirate (海賊。パイレーツですな)、grotte (洞窟) などがある。おそらく絵本などに出てくるのだろう。我が家の3歳の男児でさえ、ホオジロザメだの宇宙人だの岩山などという言葉は知っている。全部、絵本に出てくる。

辞書の中の星々

ことほどさように、「重要語」、「基本語」と称して*をつけるという作業は難しいのである。それはあたかも宇宙の中で星にたどり着こうとするようなもので、大きく明るく輝いているから、近くにある星とは限らないし、自らは輝くことのない星(惑星)がすぐ近くにあることだってある。今の私には辞書の中の*はこのような印象である。*がついているので、すごく大切そうなんだけれど、この年になるまで使った覚えのない、遠い*や、比較的よく見かけるのだけれど、自ら輝いていないので(*がついていないので)、つい見過ごしてしまいそうな語など.....。時間があるときに、辞書の中の天体観測なんてどうですか？

D.H.ロレンスの動物の描写について

経営学部

山田 晶子

D.H.ロレンス (D.H. Lawrence 1885-1930) は、その多くの名作において動物を登場させている。馬や蛇や狐や鳥等の動物たちは、題名そのものになっている場合が度々あり、動物が人間の主人公と同じ位重要な位置を占めているのであり、ロレンス文学の主題の核となって関わっているのである。今回は馬と狐を取り上げて、作品中におけるその意味を紹介してみたいと思う。

【馬】

『恋する女たち』(Women in Love 1920) における第9章「炭塵」(Coal Dust) に登場している汽車を恐れる馬の描写や『虹』(The Rainbow 1915) における第16章「虹」におけるアーシュラ(Ursula)の新生の1つのきっかけを作っている馬の群の描写は、ロレンスの作品の中でも特に有名な動物の描写である。また『チャタレー卿夫人の恋人』(Lady Chatterley's Lover 1928) の第1稿である『最初のチャタレー卿夫人の恋人』(The First Lady Chatterley's Lover 1944) においても白い馬と黒い馬が登場して、女性主人公コニー(Connie)の内面を表現するのに用いられている。

ロレンスの作品における以上のような馬の登場は、それらの小説の1要素であるが、後期中編小説『セント・モア』(St Mawr 1925) においては作品の題名そのものが馬なのである。“St Mawr”はウェールズ語であり、「偉大なもの、素晴らしいもの」という意味である。この意味の通り、主人公ルウ(Lou)が心を寄せるセント・モアという黒馬は、ロレンスの神の顕現となっている。その神とはキリスト教の神ではなくて、異教の神であり、その特徴は「目に見えない火」、「大きく燃

えるような恐ろしい目」、「闇」、「沈黙」、「別世界の存在」、「残酷な」、「非人間的」、「高貴な」、「先史古代の生物」、「蛇のよう」、「太陽のよう」、「温かい」、「孤独な」、「野生的」、「雷のよう」という言葉によって表わされるものである。ルウは、現代の機械文明に疲れて、セント・モア的なものに憧れているが、他の人間たちはセント・モアを殺そうとする。つまり現代文明とセント・モアは対立しているのである。しかしセント・モアはルウによって救われ、イギリスからアメリカへ運ばれた。ロレンスにとってはセント・モアこそ現代社会に必要な存在なのであると思われる。頭脳と論理性が強くなりすぎた現代世界においては人間は「自然さ」を喪失しており、ロレンスはセント・モアの持っている自発性、直覚性、本能性の回復が人間の新生にとって必要とされていることを述べているのである。

【狐】

『狐』(The Fox) は1923年に出版された中編小説であり、『セント・モア』と同様に本物の狐が登場しているが、主人公はマーチ (March) とヘンリー (Henry) という男女である。そして狐がマーチという女性主人公が新生をするのに大きな役割を担っている。

セント・モアの圧倒的な偉大さとは異なって『狐』における狐は2面性を持った存在として描かれている。マーチは女友達のバンフォード (Banford) と2人暮らしで農場経営をしている。しかし牛や鶏の育成はうまくいかず、2人の農場経営は傾きがちであった。その理由の1つとして狐が家屋の裏にある森から出てきて鶏を盗むということがあった。ロレンスは、この狐によって2人の女性の抑圧された性本能を表わしていると思われる。戦争中で多くの男性が戦場へ出かけていたため、女性は恋愛をする機会を奪われている状況であったのだが、このような状況が人間にとって適切ではないことをロレンスは指摘しているのである。つまりロレンスの戦争批判がここに見られるのである。

しかし性本能、生命力の象徴である狐は、一般的に考えられていることからばかりではなくて、ロレンスの小説の中においても読者にずるさを感じさせる存在であり、マーチにとって狐と同一視

されるヘンリーは、同じようにずるさを備えている男性である。彼はカナダへ行って軍隊に入っていたのだが、休暇でイギリスの故郷の村へ戻ってきた。彼はまだ20歳そこそこであり、マーチの方が10歳ぐらい年上である。彼は外観が狐のように赤っぽく、金色っぽくて、顔を前へ突き出す癖等が狐に似ている。そして狐が夜に森から農場へ出てくるように、ヘンリーも夜にマーチの家へやって来る。彼はマーチとバンフォードに勤められて2人の家に泊まるようになるが、狐に似て狩りをする人間であり、いつも銃を持って農場の周りをうろついている。ヘンリーの匂いや声も狐と関連付けられている。そしてマーチはヘンリーにくどかれて彼と結婚をする。ヘンリーは、2人の結婚を邪魔しようとしたバンフォードを巧妙に殺害した、と読者には思われる。

このように狐のずるさを持ってマーチを仕留めたヘンリーであったが、マーチは自身が男性を求めていたにもかかわらず、小説の結末では幸せな結婚生活を送っていない。この理由の1つとして考えられるのが、ヘンリーの未熟さである。彼が猫のような声の感触や、子犬のような笑顔を持っていると描かれていることから、その未熟さを感じられる。ヘンリーには、ロレンスが重視する男性としての指導者性が欠けていると思われる。そのためマーチは幸せになっていないのである。このように、ロレンスの小説における「狐」という動物は、人間の性本能・直覚・自然さを呼び覚ます正の意味と、狡さという負の意味の2面性を表わしていると言える。狐が持っている正の意味はセント・モアの表わす意味と同じであると思われる。このように、ロレンスは動物を人間を導く正の意味を備えた存在として憧憬して作品中に描いている場合が多々あるのである。

以上のように馬と狐の2例を挙げて、ロレンスの作品における動物の意味と機能を紹介した。彼は、他にも、犬や鶏や蛇や亀や兎など多くの動物を作品に登場させて効果的に機能をさせている。また機会があったら、それらについても書いてみたい。

*** 本稿は、筆者が2008年度春・秋学期に担当した科目「総合演習」の講義ノートの一部に加筆・補足したものである。